

連載 学級崩壊への対応と予防⑨ (連載最終)

卒業までを乗り切る7つ取り組み 島本政志

荒れてからは授業の質を上げようにも上げきれない。子どもが聞かないからである。ではどうするのか。教師が躍起になって聞かそうとしなくても済むようにするのである。つまりしつかり聞かなくても済むような取り組みを入れていくのである。3学期、現状維持でなんとか卒業させようという段階で行った実践。

1. あいさつ くり替え

形式的なあいさつをせずに、授業で子どもたちを巻き込んでいきたい、と思う。しかし、子どもの実態と自分の力量ではできなかった。崩れかけている学級では崩れていく進度に対して担任の力量向上の進度が上回っていただ大丈夫かもしれない

が、現実はそうではない。

「起立」と指示する。少なくない子がふらふらと立っている。手遊びしている子もいる。隣を向いて話しかけている子もいる。次に「体を止めなさい」と指示する。

立って体を止めることさえできないのに、授業で数十分にわたり集中したり、物事に取り組んだりすることはできない。

子どもたちには自分の体をコントロールできるようになって卒業してほしい。そう考えるようになって実践するようになった。

2. 視写 集中力・シンプル

ノートに書かせる量を増やす。「この年表を写しなさい」「国語の教

科書、○から○ページまで写します」と指示する。(担任も黒板でする) 取り組むことが明確なので、ごそごそ動いてしまう子も集中しやすい。

「昔の僧侶は写すことで学んでいた。写すことで考える。心で文章を読もうとする。そして、君たちにも忍耐力がつく。良いことばかりです。」と言って視写をさせた。

般若心経を書写として筆で書かせたこともある。「もはやお前たちを救えるのはおれじゃない」という気持ちもあつた。不思議と取り組んでいた。

誰が課題をやっているのか、やっていないのかをはっきりと確認する。保護者にも伝える際に、「ほとんどの子は取り組んでいるんですが、○○くんは授業に参加していません」と事実で示すことができるからである。

3. テスト 静かな時間を

月曜の1時間目は比較的静かだった。理由は遅刻や夜更かしで体力を使っていたり、徘徊していて学校に

来ていない者が複数いたりしたためである。

つまり「無気力で静か」という状態である。しかし、火曜日になるとうるさくなっていく。そこでテストを実施する。やや荒れているというような状態の子ならテスト中は静かになる。体力や気力の回復や維持を図ると良い。1日のうちで15分でも静かに取り組むことができれば子どもにとっても担任にとっても精神上、大変良い。

4. 掃除 ～これも経験～

授業が終わり子どもがかえって行く。教室には片付けられていないホウキや塵取りが。ロッカーの上には食べ残しの食器がそのまま、ボンと置かれている。

掃除時間の後の方が教室が汚くなっているという現状があった。

くじけそうになるが、これも経験だと思つて毎日掃除を続けた。いや、くじけていたが、やるしかないので

ある。

尊敬するベテランの先生が崩壊学年のサポートをしてくれていたが、その先生が黙って廊下から教室まで掃除を黙々としていた。その姿を見て、何とか続けた。

5. トイレの見回り ～早期発見～

トイレのごみ箱にお菓子の屑が無いか、落書きが無いかをチェックする。

荒れ方は落書き↓器物破損↓対教師暴力へと進んでいくことが多い。

早めにチェックしあれば、落書き落としで綺麗にするのである。

6. 職員室に戻る ～精神衛生～

教室が荒れているのだからずっと教師がいなければならぬのかもしれないが、まず心がもたない。

だから同僚の教師も3学期になつてからは毎時間ごとに職員室に戻りお茶やコーヒーをのんでいた。そうすることで、怒りを鎮め、なんとか

次の時間に臨むことができるからである。

7. 職員がこづつをこづつ

学校全体、つまり職員も地域も、保護者も全てではないにせよ、多くの人が課題意識をもつて学年や担任をサポートしようとしているかどうかが大切である。対岸の火事意識ではだめである。「大丈夫ですか？」と言つた声掛けではなく、実務のサポートを学校として作り出せるかどうかである。

一人で戦わされている、学年だけががんばっているという状態では担任はどんどんと苦しくなっていく。

教育困難校とよく言われる学校に7年いた。何人も辞めていく先生、病休に入られる先生を見ました。ただ私の中で意味づけが難しい事案も多々ありますが、連載を終えます。ありがとうございます。